

新潟県 新潟市 信濃川ウォーターシャトル 信濃川下流の堤防設備 現地視察の報告

石狩川クルーズ研究会 大河内康広



河川調査船「弁天丸」が離岸する様子 / 江別市 河川防災ステーションにて撮影 2022/7/31

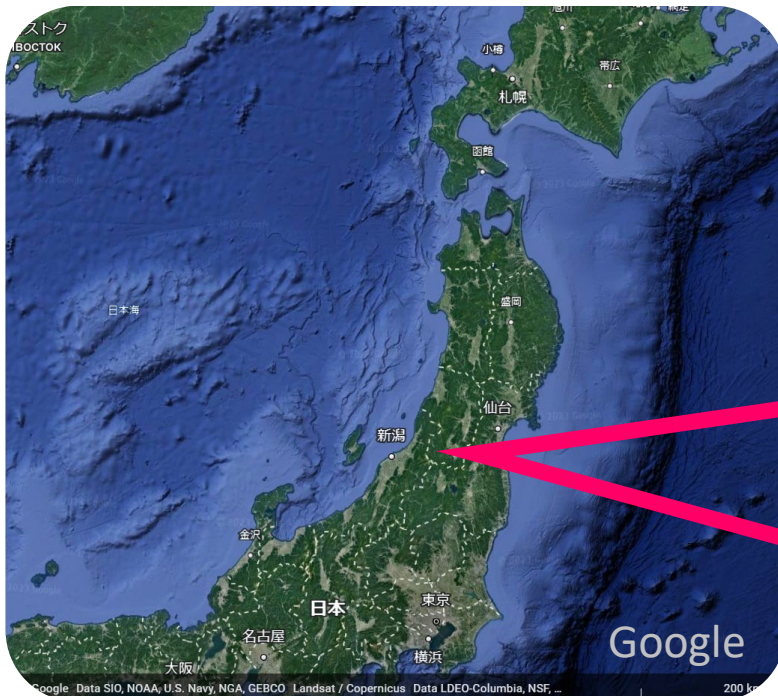
本報告について

- 2022年12月 当会にて新潟県 新潟市の信濃川下流域を中心に水上バスを運航する信濃川ウォーターシャトル株式会社様を視察しました
- 周辺の親水堤防施設の写真なども撮影しましたので、本勉強会における議論の参考となることを期待して、この場を借りて共有させていただきます

本視察について

日本で最も長い川として知られる「信濃川」

その終着点である新潟市は歴史的に水運が盛んな地域です



本視察について

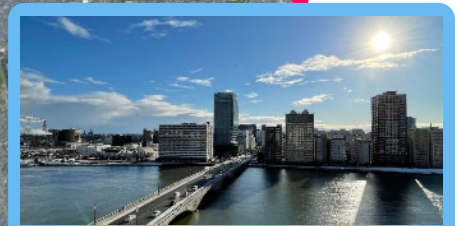
かつて、北前船の寄港地でもあった新潟港には現在も佐渡島、北海道、西日本方面へのフェリー等が就航しており、港には多くの船舶が出入りしています。

一方で、信濃川を利用する水運は全国各地の状況と同様に鉄道・自動車に置き換わったことで衰退してきました。



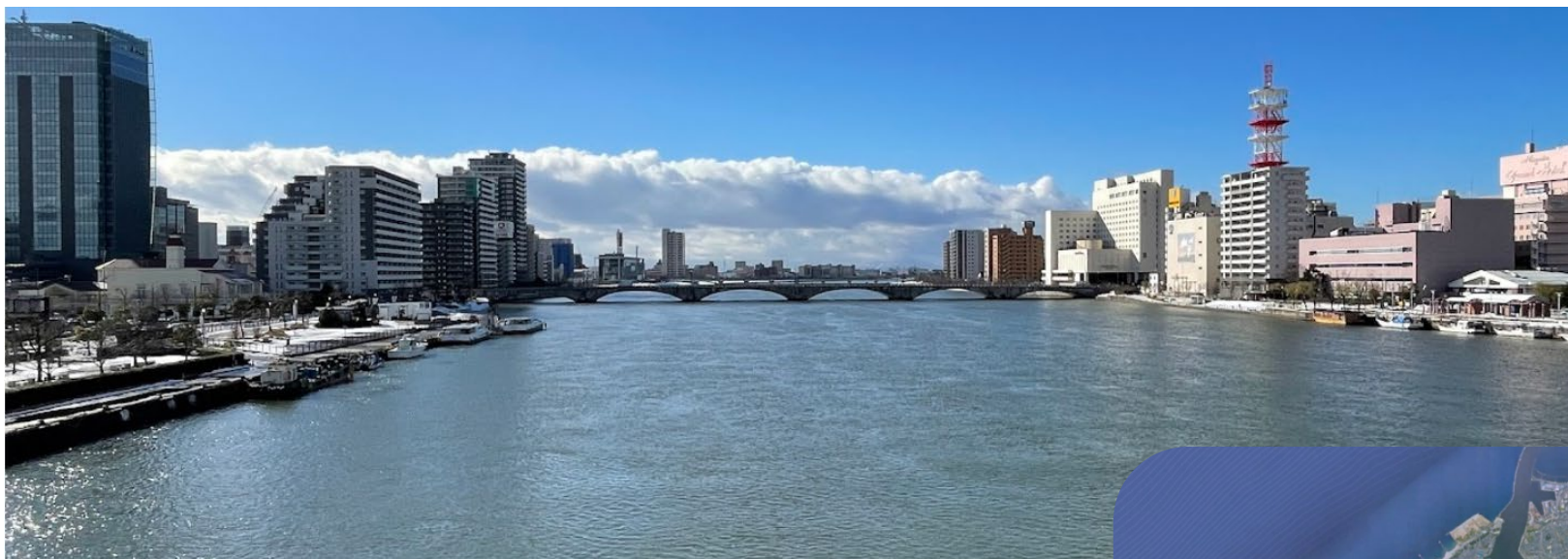
本視察について

そんな中、新潟の象徴である信濃川に水上交通を復活させる試みとして水上バスの運航事業を行っている
信濃川ウォーターシャトル株式会社様(1998年 設立)を視察しました

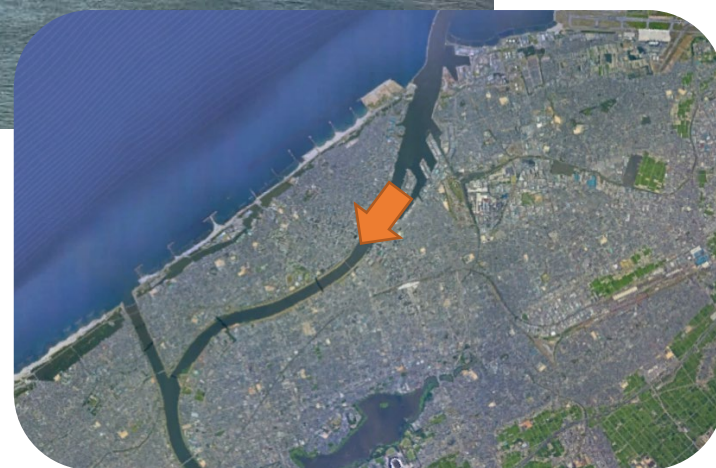


信濃川ウォーターシャトル

新潟市内 信濃川河口付近の様子



信濃川河口付近(上流方向に望む)
中央に架かるのは 国指定重要文化財の
萬代橋(ばんだいはし)



新潟市内 信濃川河口付近の様子



万代テラス

やすらぎ堤

みなと・さがん

信濃川河口付近の様子



親水堤防「やすらぎ堤」として整備されたエリア

信濃川河口付近の様子



親水堤防「やすらぎ堤」として整備されたエリア

信濃川河口付近の様子

約 4.5 kmの区間の両岸が「やすらぎ堤」として整備されている

公益社団法人 新潟県観光協会 にいがた観光ナビ より 引用

<https://niigata-kankou.or.jp/spot/10564>





万代テラス

やすらぎ堤

みなと・さがん

信濃川河口付近の様子



信濃川左岸緑地「みなと・さがん」として整備されたエリア

信濃川河口付近の様子



岸壁には漁船・業務船・屋形船などが常時係留されている
(係留許可の審査は厳しいが100トン未満の船舶は無料)



水面側の広場は御影石で仕上げられているという



万代テラス

やすらぎ堤

みなと・さがん

信濃川河口付近の様子



「万代テラス」として整備されたエリア(右岸)



カフェ用の設備が整備されている

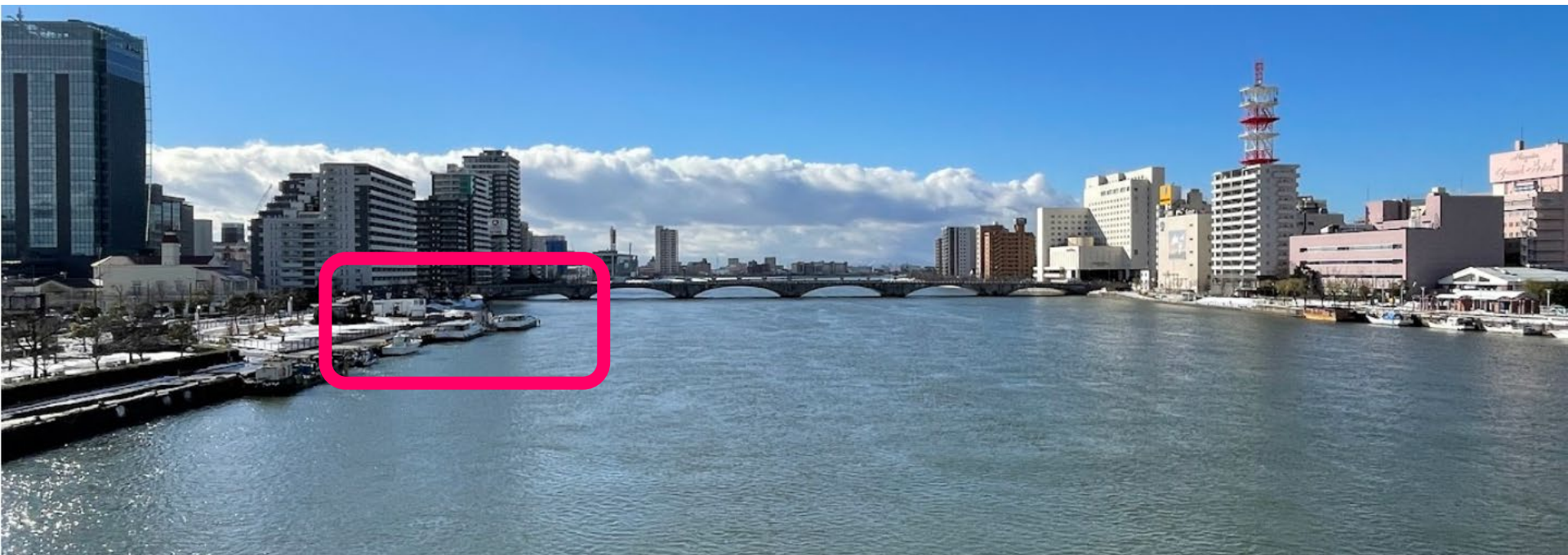


夜はイルミネーションの企画が行われていた



休息スペースとして
広い屋根が設けられた公衆トイレ
※より快適に過ごせる空間として整備したいと市民の要望もあったが、元々公衆トイレとしての目的で用地を確保してしまったため実現には至らなかったという

信濃川ウォーターシャトル 係留場所



信濃川ウォーターシャトル 係留場所



万代テラス側(右岸)に信濃川ウォーターシャトル2隻
(アナスタシア号 M.S.Anastasia とベアトリス号 M.S.Beatrice)が係留されている

信濃川ウォーターシャトル 係留場所



万代テラス側(右岸)に信濃川ウォーターシャトル2隻
(アナスタシア号 M.S.Anastasia とベアトリス号 M.S.Beatrice)が係留されている

信濃川ウォーターシャトル 係留場所



給水(清水)は近くの水道から供給を受ける 燃料は業者のミニローリーが入り定期的に給油

信濃川ウォーターシャトル 乗り場 (朱鷺メッセ)



信濃川ウォーターシャトル 乗り場(朱鷺メッセ)



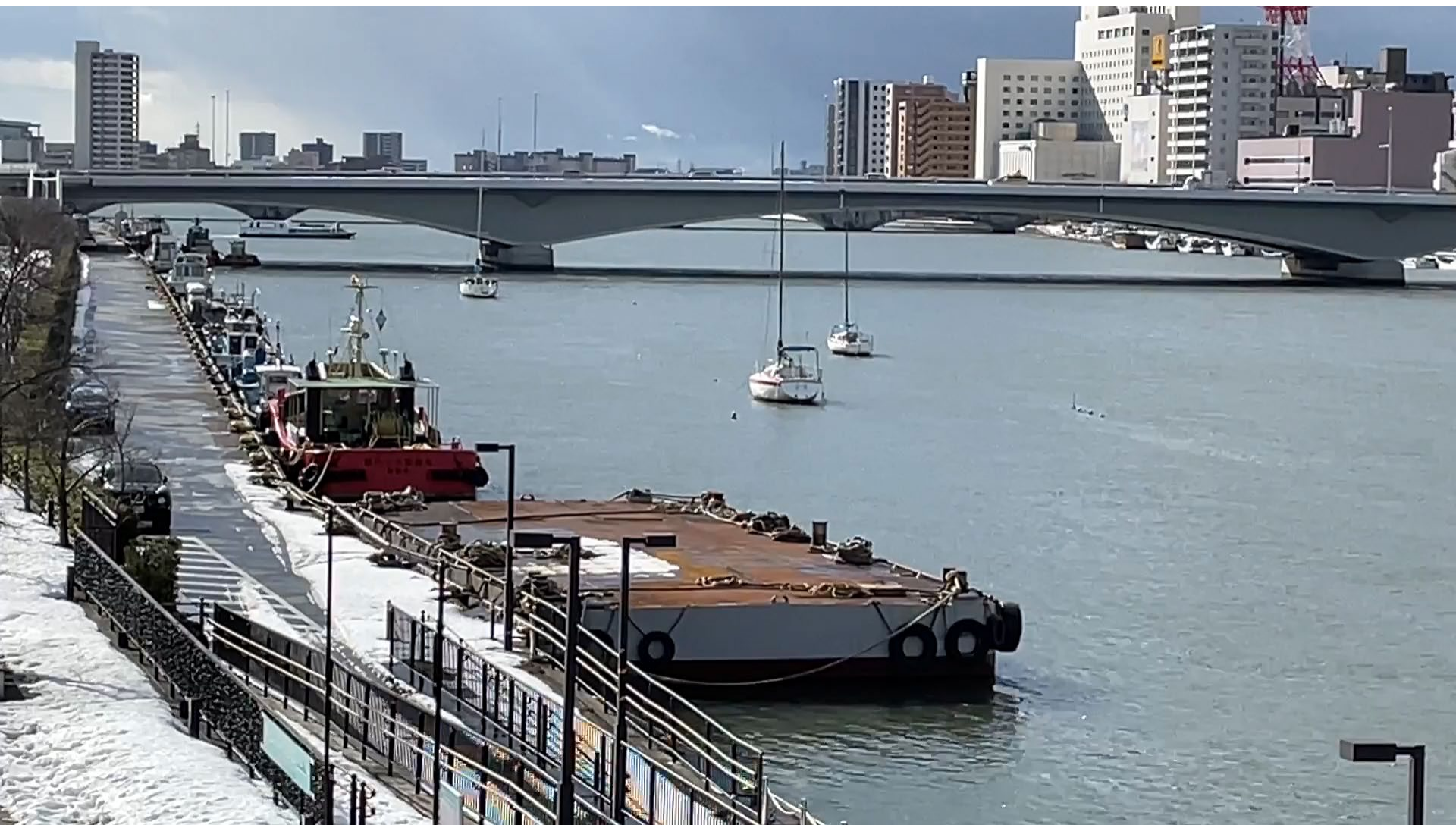
乗り場のひとつ **朱鷺(とき)メッセ**は
コンベンションセンター、オフィス、ホテルなどが入る複合施設

信濃川ウォーターシャトル 乗り場(朱鷺メッセ)



乗り場

信濃川ウォーターシャトル 乗り場(朱鷺メッセ)



係留場所から乗り場への移動【動画】

信濃川ウォーターシャトル 乗り場(朱鷺メッセ)



係留場所から乗り場への移動【動画】

信濃川ウォーターシャトル 乗り場(朱鷺メッセ)



乗り場への着岸【動画】

水上バス・アナスタシア号 乗船・船内の様子



水上バス・アナスタシア号 乗船・船内の様子



【動画】

水上バス・アナスタシア号 乗船・船内の様子



【動画】

水上バス・アナスタシア号 乗船・船内の様子



【動画】

水上バス・アナスタシア号 乗船・船内の様子



【動画】

水上バス・アナスタシア号 乗船・船内の様子



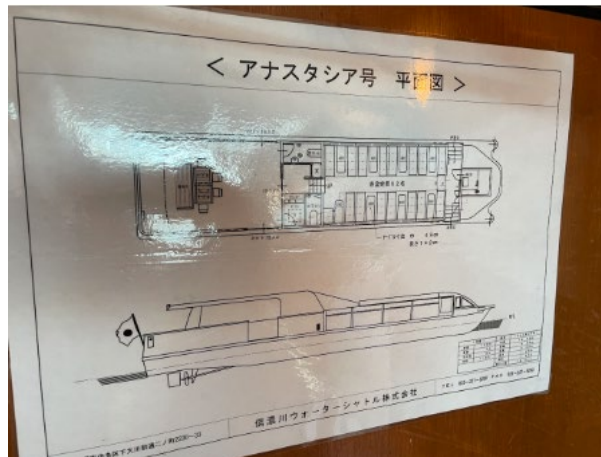
【動画】

水上バス・アナスタシア号 乗船・船内の様子



【動画】

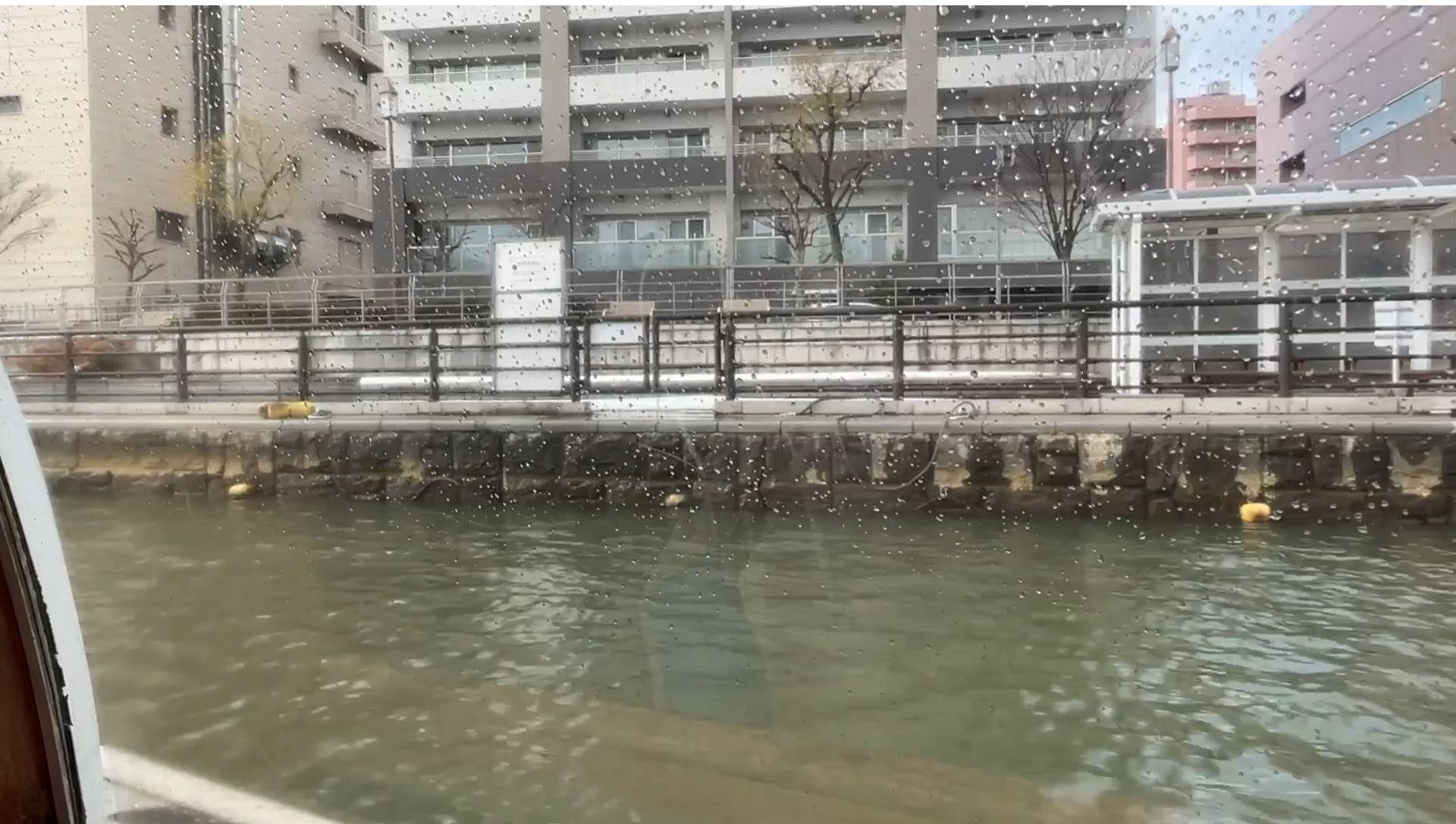
水上バス・アナスタシア号 乗船・船内の様子



水上バス・アナスタシア号 乗船・船内の様子



水上バス・アナスタシア号 乗船・船内の様子



着岸【動画】

信濃川ウォーターシャトル株式会社 本社



代表の栗原道平社長に信濃川ウォーターシャトルの設立経緯や事業の詳細、コロナ禍における運営状況、船舶の安全運航管理などについてインタビューしました

設立当初は新潟市民の日常の足としての水上バスを目指した一方で、イベント利用や観光向けの需要を取り込んできた経緯や今後、水上カフェについて開始を計画していることを伺いました。



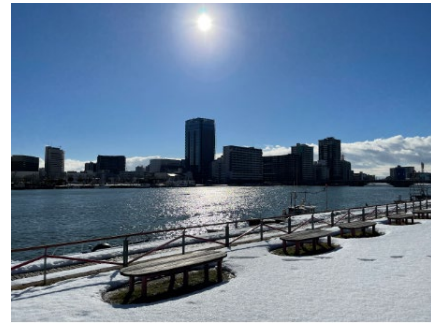
本社フロアから河川の状況が確認できる

本視察を通してのまとめ・所感

信濃川下流における水辺施設
(やすらぎ堤、みなと・さがん、万代テラス)
および信濃川ウォーターシャトルの視察を通して

信濃川下流における水辺施設(やすらぎ堤、みなと・さがん、万代テラス)および信濃川ウォーターシャトルの視察を通して

- 親水を目的とした堤防設備として、船と陸地をつなぐ岸壁・係船設備は、水上へのアクセスの可能性を生むために重要な要素である
- 信濃川下流域においては新潟港の歴史的な経緯・立地によって、それらが十分に整備されていたため水上バスという新規事業を実施できるに至った
- 国の事業として江別のかわまちづくりを実施するにあたって、長期的な視点で検討されることが流域の将来の発展に寄与するのではないかと考える
⇒ 「かつての“江別港”の復活」などの考え方



信濃川下流における水辺施設(やすらぎ堤、みなと・さがん、万代テラス)および信濃川ウォーターシャトルの視察を通して

- 千歳川、石狩川において 現状では具体的な利用の予定がなくとも、船舶を複数(5～10隻程度)同時に係留しておける岸壁を整備することで、
将来の漁業、観光業、水運業、イベント、河川管理・工事、災害対応等、水域利用の可能性が大きく広がる
⇔ 十分な設備がなければ、新しい利用の発想は生まれない。
将来に河川利用が広がる可能性は低いままとなる。



信濃川下流における水辺施設(やすらぎ堤、みなと・さがん、万代テラス)および信濃川ウォーターシャトルの視察を通して

- 係船設備としては必ずしも棧橋のような構造物である必要はなく、最低限のものとして20トン未満の船舶を想定し、安全に着岸・乗下船できる石造やコンクリート造の護岸、ある程度の水位変動に対応する緩衝用のフェンダー、係船するためのビットなどを整備することで、将来の需要に応じて活用が可能となるのではないかと考える
- また、堤防の河川沿いにフェンス等を設置する場合は、係船設備の付近は柵の外側(水側)に立ち入って作業できるスペース、出入口となる箇所が必要である



現状の
江別 河川防災ステーションの船着場

信濃川下流における水辺施設(やすらぎ堤、みなと・さがん、万代テラス)および信濃川ウォーターシャトルの視察を通して

- 設備位置の候補として具体例を考えると
 - ① **観光用の船などの乗下船**を想定した場合、移設する旧岡田倉庫付近の左岸が望ましい
 - ② **夜間などに常時係船をする**位置としては、新江別橋(国道12号線)の橋梁下の空間を活用することで雨水・雪害を避けやすくなる可能性もある
- 用途を意識して各所を整備することで将来的な活用の幅が広がると考える



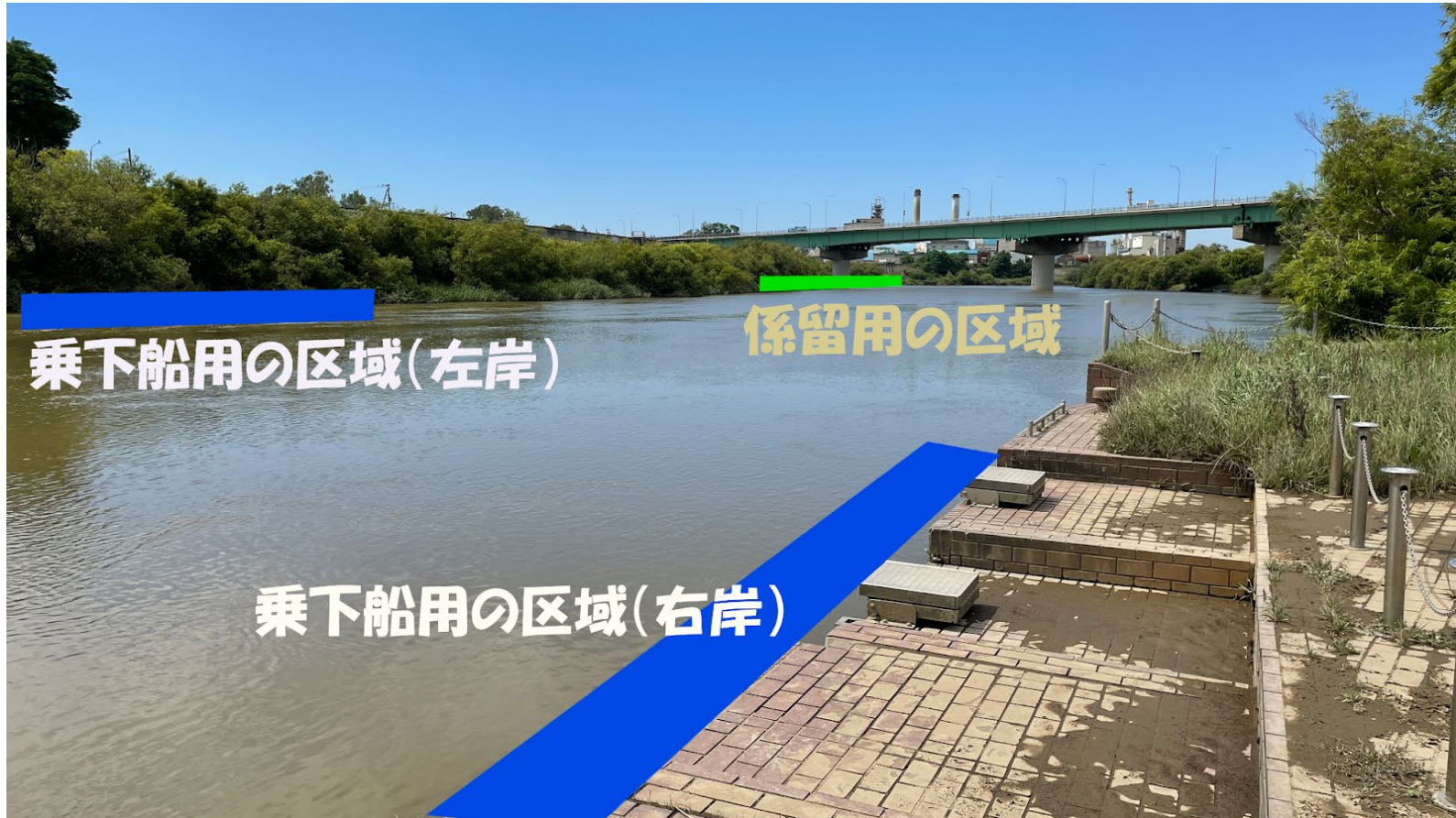
①旧岡田倉庫付近(乗下船区域の案)



②新江別橋の橋梁下(係留区域の案)

信濃川下流における水辺施設(やすらぎ堤、みなと・さがん、万代テラス)および信濃川ウォーターシャトルの視察を通して

- 設備位置例のイメージ図



信濃川下流における水辺施設(やすらぎ堤、みなと・さがん、万代テラス)および信濃川ウォーターシャトルの視察を通して

- 冬季の河川凍結について
石狩川本線は一部が冬季に結氷する。
一方で、千歳川の石狩川合流地点付近、河川防災ステーション付近は比較的凍結しにくいように観察される
- オホーツク沿岸等での流氷の対策例などを参考にし安全策を検討した上で、**通年での係船・観光利用なども視野に入れる**ことで河川活用の幅が広がると考える



一部が凍結した石狩川



同日の千歳川

信濃川下流における水辺施設(やすらぎ堤、みなと・さがん、万代テラス)および信濃川ウォーターシャトルの視察を通して

- 船舶の上架設備について
現在は河川防災ステーション前に斜路があるのみだがこれはごく小型のプレジャーボート等の利用に限られる。
- より大きな船舶を利用するためには**リフト式の上架設備**などが整備されることが望ましいが、現時点での利用想定に対する費用対効果の観点から、石狩近辺の港などの設備で代用せざるを得ないか。(要調査)



河川防災ステーション前の斜路



上架された船舶(イメージ)

信濃川下流における水辺施設(やすらぎ堤、みなと・さがん、万代テラス)および信濃川ウォーターシャトルの視察を通して

- 季節による水位の変動や出水時の対応、事故等の防止、救難者発生における体制については実際の状況を調査の上で利用者との間で、**実務的、効率的な運用、連絡ルールを定めることも必要。**(要調査)



増水時の河川防災ステーション 船着場の様子

信濃川下流における水辺施設(やすらぎ堤、みなと・さがん、万代テラス)および信濃川ウォーターシャトルの視察を通して

十分なインフラの整備・検討により将来的に例えば

- 遊覧船、水上バスなどの運航実現
- 石狩(日本海)への接続を利用したマリンレジャーの拠点化
- カヌーなどマリンスポーツの振興
- 水運を活用したマルシェ等のイベント実施
- 遊漁券販売等による河川レジャー振興、水産資源の保護
- など幅広い波及効果、経済効果が望めるのではないかと考えます。



さいごに

今回のかわまちづくり勉強会として 遠い将来を見据えた検討することで、
江別や条丁目地区のみならず、河川流域、石狩地域、また北海道全体としての地域の価値が一層高まるものになるのではないかと考えます。

以上について、
本勉強会における議論の一助となりましたら幸いです。

